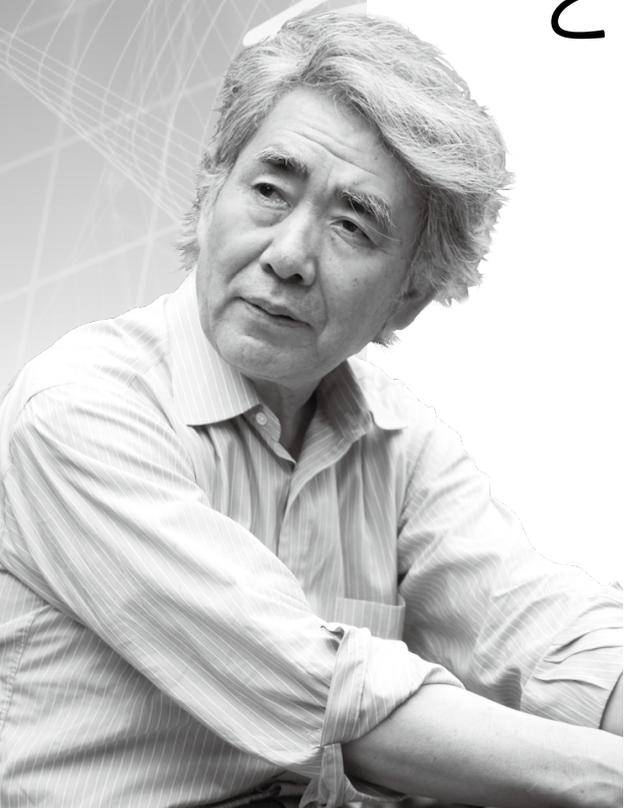


学術の風景

Vol. 13

オンライン国際会議と日本のサイエンス



永田和宏

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、私たちの日常生活に大きな影響を与えたことは言うまでもないが、学問の世界にもこれまでに想定していなかった変化をもたらし、それがいまなお続いている。

なかでも、学会のあり方がすっかり変わってしまったことは、誰もが強い印象を持っているだろう。どの学会にも年会あるいは大会があり、会員が集って研究成果の発表を行う。他の講演やシンポジウムを聴講することによって、最新の成果のなかから自らの研究に役立つようなデータの収集に努めるのも大切な意味である。あるいは、自らの専門分野外の発表や講演を聞くことによって、新たな領域の知見や発想を得ることもある。

私の専門は、生命科学ということになるが、もう少し絞って言えば細胞生物学である。日本細胞生物学会を中心に活動をしてきたが、自ずから周辺の学会、日本分子生物学会や日本生化学会、あるいはもう少し専門性の強いいくつかの学会に関係してきた。

私は学生や院生たちに、学会発表は必ずしも業績にはならないが、学会にはできるだけ出るように言ってきた。発表の経験を積むことのほかに、他の研究者がどのようなモチベーションと考え方のもとに研究を進めているか、それらを生の声として知ることが、延いては自らの研究の方法や目的、あるいは発想や挑戦性に大きな示唆を与えることがあるからである。

そしてそれ以上に大切なものが、そこでの同世代間の情報交換と交友関係の構築である。同じ分野で頑張っている知人を得ることは、自らへの励ましともなり、自分が困ったときに気軽に相談できる仲間を持つということは、教授のアドバイスよりも有益な場合もある。サイエンスにおける評価は、自らの努力で得た成果による以外にはないが、いっぽうでサイエンスをやっている喜びは、あるいはやり続けてきて良かったという実感は、同世代で忌憚なく意見を交せる友人、

プロフィール

永田和宏 (ながた かずひろ)

JT 生命誌研究館館長、京都大学名誉教授、

京都産業大学名誉教授

専門：細胞生物学

サイエンスをベースに何でも好きなことを話せる友人を持つことに尽きると言ってもいいかもしれない。

ところが、このコロナ禍で多くの学会はZoomやTeamsを利用したオンライン会議がほとんどということになってしまった。学会だけでなく、新学術研究やCRESTなどの科研費絡みの班会議もほぼすべてオンラインという状況である。加えて、国際学会が私の分野ではほぼオンラインとなってしまったのは、大きな変化であった。

Cold Spring Harbor、Gordon、Keystone、FASEB、EMBOなどという、何らかの形で年に何度か出席せざるを得なかった国際学会もほぼすべてが、中止かオンラインとなった。

私が特に強くかかわってきたProteostasis (タンパク質恒常性) に関わる分野は、Cold Spring Harborのミーティングが中止になったことを受けて、毎週水曜日に一人ずつ講演が割り振られ、世界中の研究者が同時に聴講するというオンライン会議に変わった。

これは画期的なシステムで、居ながらにして世界の第一線の大物たちの研究発表を聞けるのだから、ありがたい話である。2020年の7月ごろから始まって、現在も続いている。これからも半年先の演者まで決まっている。新しい国際学会のスタイルとして、コロナ禍が終息しても何らかの形で残っていくのだろう。飛行機で10時間余りをかけ、一週間ほどは時間を取られるこれまでの国際学会に較べれば、費用的にも時間的にも大いにありがたいことではある。

しかし実際には、このスタイルの国際学会にも当然のことながらデメリットがある。年に数回、世界のどこかで顔を合わせ、旧交を温めるとともに、共同研究の相談や未発表のデータなどの情報をも得ていた、そんな友人たちとの交流がなくなったことは確かに大きい。だいたいそのような情報は、食事をしたり、バーで一緒に飲みながらということが多かった。それがで

きなくなったのは大きな負の要素である。

しかし、特に日本人研究者にとって、このような全世界一斉の学会の大きなデメリットは、時間の要素であることに改めて気づかされることになった。先に述べた週一の学会は、アメリカ時間の昼、ヨーロッパの夕方、そして日本は真夜中なのである。私も話せと言われて講演したが、講演時間は午前2時から3時まで。Good night! と言って講演を終わったのは初めてだった。

毎週、深夜に二時間ほど取られるオンライン会議は、日本での日常生活を考えると、どうしても参加への意欲を削がれることも致し方ないだろう。Cold Spring Harborのオンラインミーティングも行われたが、やはり日本の深夜から朝まで続くのである。これが三日も続くとなるとかなりの苦痛である。いずれの学会も日本人の参加が際立って少ない。

この方式がこれ以降もなんらかの形で継続するとすると、その時間設定について、根本的な改革を行わなければ、日本の若手研究者が、どこかで世界の動きから置いてきぼりを食うことが懸念される。まだあまり注目されていないことだと思うが、私は、日本のサイエンスにとって一つの大きな曲がり角、その危惧について真剣に考えておくべきではないかと思うのである。